

☐ 授業での活用 ☒ 家庭学習での活用 ☒ パフォーマンステストでの活用 ☐ 小学校 ☐ 中学校 ☒ 高等学校

実践のポイント

家庭学習（AI英会話内容等）と授業を連動することで、言語活動が充実。

実践前 (ねらい)

- 生徒の英語を学ぶ意欲・関心の向上。
- 生徒のやり取りする力の向上。
- 言語活動における生徒同士等の対話の充実。（授業改善）



実践後

- 生徒の関心・意欲が向上とともに、英会話力も向上。
- AI英会話で経験を生かして、生徒同士等のやり取りの内容が充実。
- AIの客観的評価を活用した授業改善が促進。

実践内容

- 実証校数：2校（高等学校：2校）
- 対象学年：高等学校：第1学年
- 研究内容：家庭学習でAIと英会話を実施し、授業と連動することで、言語活動の充実と学習意欲等の向上
- 対象人数：680名（高等学校：680名）
- アプリ等：LANGX Speaking（株式会社エキュメノポリス）

【AIの活用方法】

実証の事前事後

英語力を診断する会話型テスト実施。



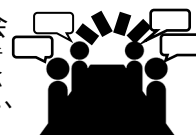
テーマ別英会話

- ・全12回の英会話を週2、3回程度。
- ・期間1～2か月程度。



【授業との連動】

- ・個人及びクラス等でまとめられた判定結果等を生かした授業の実践。
- ・AI英会話の内容を授業で扱ったり、AI英会話の経験（会話の継続、相手意識のある質問等）を生かしてやり取りを行わせるなど、言語活動が充実した指導の実践。



「AIの効果的な活用」と「教師の役割の変化」

◆授業との連動

- ・家庭学習で扱ったテーマに関連するやり取りを、授業で実施した。
- ・授業と家庭学習が相補的に作用する工夫を行った。



【具体例】

- ・家庭学習の会話内容を想起させ、授業中のやり取りで表現等を活用させる。



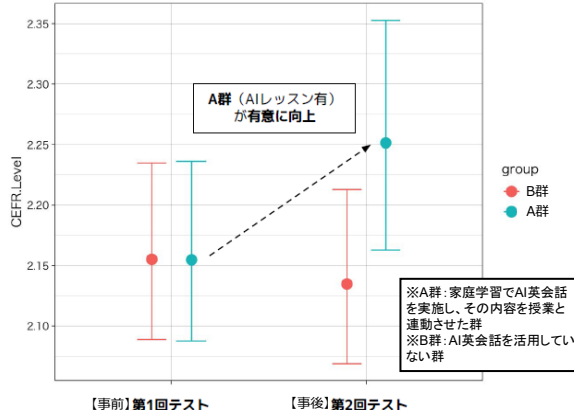
◆パフォーマンステストとしての活用

- ・生徒は、AIからのフィードバックにより、自身の英会話力を知り、課題を明確にすることで、学びの自己調整を促す。
- ・教師は、パフォーマンステストの結果から生徒の課題を分析し、身に付けさせたい力を明確にした授業改善を行う。

- ・教師には、生徒の自己調整を促す、具体的な働きかけが必要となった。また、「話すこと」「書くこと」の両方の指導で、何を身に付けさせたいのかを明確にした言語活動を設定することが更に重要となった。

成果検証

◆生徒の英会話力



AIによるパフォーマンステストにおいて、実証前後を比較すると、A群のスコアが向上している。

◆生徒の関心・意欲

実証前後を比較すると、「英語の勉強が好き」「英語で話すことが好き」「英語の授業で、英語でのやり取りが緊張する」において、実証後が向上している。

◆教師の指導

アンケート及びインタビューから検証すると、
・生徒の一人一人に応じた質問レベルや話す速度になるので、個別の学習には効果的であり、授業における言語活動に好影響となる。また、授業以外でも英語を聞いて話す機会が増えることもよい。
・AI英会話の内容を授業と連動することで、言語活動が充実し、生徒の気づきと学びの機会が拡充。
・AI英会話の活用が有用でも、生徒が簡単にICTを活用できる能力の育成が必要。

ここが落とし穴！「AIの活用」と「教師の役割」

◆家庭学習におけるAI活用

導入時は、AIと英会話をさせることが目的となってしまった。教師の進捗管理が主となることで、学習意欲が低下する生徒もみられた。生徒が意欲をもって取り組めるよう実態に応じた工夫が必要といえる。

学校でAI活用の丁寧なトライアルを実施することや、他教科の家庭学習等と調整、担任等と連携した声かけなどを行うことで、生徒が自ら取り組めるよう改善。（端末操作に慣れていない生徒もいるため実態に応じた丁寧な対応が必要。）